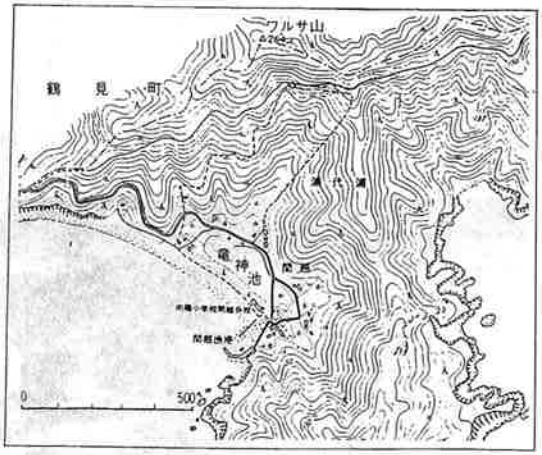
海部の地理（一六）

―米水津村間越の地域調査―

矢野彌生
（会員・佐伯市中山区）



第１図　間越の地形と集落

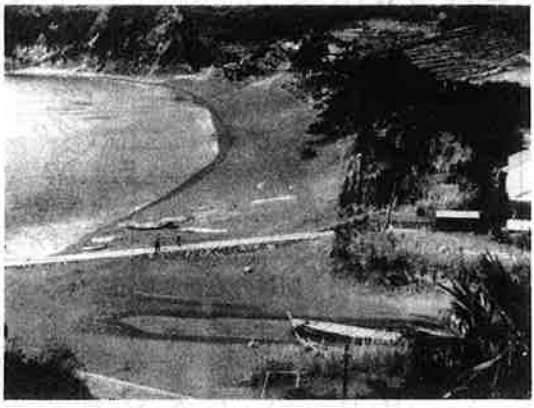
米水津村間越（はざこ）の漁業集落について、筆者は昭和六十一年の八月に、米水津村教育委員会の方や現地の成松与吉氏の協力を得て、地域調査を実施した。今回はそのときの調査記録を中心に報告したい。

集落の立地　間越の集落は米水津湾の北岸に位置しており、集落の背後は米水津村と鶴見町の境界にあるワルサ山（標高二六五㍍）が迫まり、前面は潟湖（せきこ）（竜神池）と砂丘をはさんで外洋に臨んだ小漁業集落である。

集落は二〇戸の家屋が、潟湖の周辺の小低地や山地の傾斜地に点在している。また、小学校や二戸の民家は砂丘に立地している。

間越の浜堤と防風保安林（昭和61年）

観音崎と灘手に挟まれた間越には、汀長一キロメートルに及ぶ見事な砂礫海岸がある。また、クロマツにハマユウの生育する浜堤（高さ一〇メートルぐらい。波によって打ち上げられた砂礫が、堤状に堆積した地形）の背後には、雑木に囲まれた周囲五〇〇メートルの潟湖（砂洲が入江をしめ切り形成された小さな湖）があり、ウナギやシジミが採れることでも知られている。『佐伯志』[1]には、「間越の池は、広さ二町四反歩余あり、海潮之に通じ、鰡其他の魚類を生ず」とある。



昭和10年代の間越の浜堤と松林
（『米水津村誌』より引用）

鶴見半島の南側にある間越の地質環境をみると、四万十帯[2]のうち浦代帯に属しており、岩質は粘板岩優勢の泥質岩と砂岩が交互に分布している。間越海岸には、写真に示すような、粘板岩と硬砂岩の褶曲構造の現われた地層をみることができる（粘板岩は、粘土が固まってできた岩石で、かたくて、平らな板状に剥離する性質の強い堆積岩、砂岩は石英粒や、その他の鉱物からなる砂の粒が集まって固まった堆積岩）。

褶曲がみられる地層
（間越海岸・昭和61年８月）

いま、間越の潟湖の水質の状況をみると、第１表のとおりである。第１表に示した各池はいずれも海岸から五〇～一〇〇メートルの範囲に近接しており、水位も海抜五メートル以内の池である。これら三つの池のうち六段池（上浦町）

第1表　池の水におけるイオン成分の重量百分組成(%)

	Na	K	Ca	Mg	SO_4	HCO_3	Cℓ	Cℓ濃度(mg/l)
蒲江高校前	18.5	1.9	8.2	4.2	3.4	28.7	35.3	158
間　　越	26.0	1.3	3.4	4.1	5.7	16.1	43.4	177
最勝海六段池	28.1	1.2	2.1	5.8	4.7	4.3	53.8	626
海　　水	17.9	1.1	1.2	3.7	7.7	0.4	23.4	19,800

(「日豊海岸国定公園学術調査報告書」(昭和60年)による)

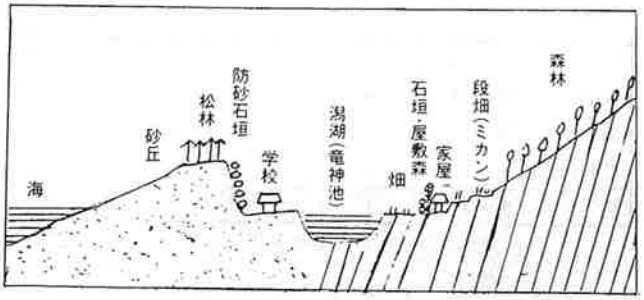
の塩素濃度は六二六ミリグラム/リットルと海水の直接混入を思わせる高い値である。蒲江、間越の各地もcl(塩素)を一六〇ミリグラム/リットル内外含んでおり、この地域の河川水が示す一〇ミリグラム/リットル以下の値に比べると両池とも塩分を相当高く溶存していることが分かる。塩分のうち、陽イオンとしてはNa(ナトリウム)、陰イオンとしてはclが最も多く含まれており、化学組成は沖黒島や深島の表流水と同様に海水型を示している。(3)

間越の潟湖の北側の自然林の中にウバメガシの巨木がある。ウバメガシは県内では主に佐賀関より蒲江町仙崎あたりまで分布しており、分布の中心は鶴見半島と四浦半島である。米水津村では間越のほか、色利浦・間浦・芳ケ浦にも自生している。

ウバメガシと自然林
(『米水津村の文化財』より引用)

周囲約500mの潟湖(ラグーン)

間越のウバメガシは、傾斜走向S一〇度E、標高五メートル、傾斜角にして二五度の急斜面にみられる。(4)胸高直径六〇～七〇センチメートル、樹高一五～一八メートルのものが六本、林内と周辺にある。(5)このような巨木が自然林の中にみられるのは珍しいという(昭和五十九



第２図　間越の土地利用模式図

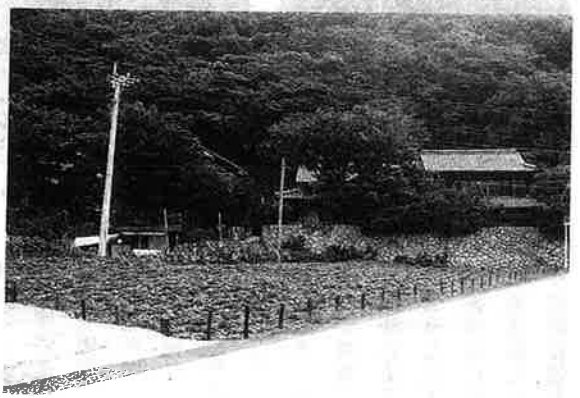
年に県の天然記念物に指定される）。

集落の形態上の特色をみると、間越の集落は、防潮・防風の備えが比較的行き届いているようである。防潮・防風・砂防の施設としては、石垣・樹垣・屋敷森などがみられる（第２図参照）。家屋も一般に南に面して建てられているものが多い。また、西よりの風は砂が多い。昭和五十一年に海岸に防砂堤を築造し、砂による漁港の埋没を防止している。

最近の間越地区では、山地の急傾斜地から山ろくの緩傾斜地へ家屋が移動しており、新築の家屋がみられる。集落の立地にとっては飲料水の確保は絶対の条件である。間越地区では、昭和五十二年（一九七七）飲料水供給施設が地区内に完成してからは、古くから利用された井戸から、簡易水道へと移行し、一段と生活も便利になった。

簡易水道以前の飲料水は、地区に五つの井戸があり、すべて共同井戸であった。中には、塩分の多い井戸もあり、不自由であったが、それも改善されて、現在簡易水道と井戸水を併用している家は少なくなっている。

〈集落の成立は近世以降か〉　間越の集落はいつごろ成立したか。『豊後国志』には、「間越浦・小浦・竹之浦・



石垣と屋敷森で囲まれた民家

浦白浦・色利浦・宮之浦以上六浦。號米水津」とあり、いずれも漁業を主とした集落である。また、文化七年（一八一〇）の伊能忠敬の『九州測量日記』の三月二一日には「浦白浦字間越人家五軒」とあり、小村（しょうそん）があったことが分かる。

また、間越には江戸期に本匠村から移住してきたともいわれる。村造りの第一歩ともいわれる「間越三軒組」の伝承も残っている。また、江戸期に、浦代浦より移住してきた人もいたという。おそらく、間越の集落の成立は近世以降と考えてよいのではないかと推測される。

更に、間越の集落から東方二キロメートルほど離れている芳ケ浦の集落もその成立は、伝承や天保二年（一八三一）の墓石の存在からみて、近世末期ごろ、新浦として成立したものではないかと考えられる。

過疎化の進行　間越の集落は、行政上の区分では、中心集落の浦代浦に属しているが、地理的な位置からみても、どちらといえば、古くから陸の孤島的な性格が強い。

〈三〇年間に人口六九・八パーセント減少〉　現在、間越の世帯数二一、人口六四人（平成二年一〇月一日現在）で、集落規模は小さい。国勢調査による過去三〇年の人口推移と人口増減率をみると、第2表のとおりである。第2表で明らかなように、昭和三十年（一九五五）の二一九人をピークに、それ以後は確実に人口が減少し、過疎化が進行していることが分かる。

間越の人口は過去三〇年間に六九・八パーセントも激減しており、村内の各集落の中でも、人口減少率が最も高い。最近ではやや人口は横ばいであり、昭和六十年（一九八五）には、初めて同五十五年に比べて、人口が一五・八パーセントと増加していることは注目される。

一方、世帯数では、昭和二十年（一九四五）ごろには二九戸、同

第2表　間越の人口推移

（単位：人、％）

年	昭和30	昭和35	昭和40	昭和45	昭和50	昭和55	昭和60	増減率 35/30	40/35	45/40	50/45	55/50	60/55	60/30
人口	219	195	133	90	57	57	66	−10.9	−31.8	−32.3	−36.7	0	+15.8	−69.8

（国勢調査による）

四十五年には二五戸、同五十年一六戸、同五十五年二〇戸、同六十年二〇戸となり、平成二年（一九九〇）には二一戸となっている。過去四五年間に八戸が挙家離村し、他地区へ移転している。現在でも、地区内に住む人のいない廃屋が野草に覆われて、点在している。また、昭和六十一年には、男子三人（いずれも家族同伴）、女子二人が関西方面に出嫁ぎにでており、比較的少ない人口流出である。

〈芳ケ浦の世帯、人口の推移〉 間越の東方、約三キロメートルほど離れている芳ケ浦の過疎化の状況をみよう。現在、芳ケ浦の集落には、建網の漁業を営んでいる漁家が一戸立地している。ここでは、廃村に似た現象がみられる。芳ケ浦は間越地区とともに、浦代浦の飛地で、明治初年の壬申戸籍には三戸、一五人が記録されている。間越地区が米水津村内で縁組をしているのに対して、芳ケ浦では、古くから鶴見町の梶寄との縁組が多い。

芳ケ浦の集落

昭和二十年の敗戦当時には、芳ケ浦の集落には五戸、三二人が居住していた。昭和四十一年当時も、芳ケ浦には五戸あるが、漁港がないため、梶寄に家を借りて漁業を営んでいる。梶寄へ完全移住をしないのは、地先の漁業権を失いたくないからだという。(6)

しかし、日本経済の高度成長がつづく中で、農漁村からの人口流出は増加していった。かっては四〇人も働いていた銅坑もあったが、芳ケ浦も漸次挙家離村する家が増加し、昭和三十九年に一戸（鶴見町梶寄へ）、同四十六年に一戸（神奈川県へ）、同四十七年一戸（梶寄へ）、同五十年一戸（梶寄へ）が離村して、現在、一戸が立地するのみとなった。

沿岸漁業の今昔 間越の周辺は多くの岩礁や横島群島、白子島などの島々に恵まれており、古くから県内

でも屈指の好漁場であった。特に、イワシ・ブリ・シビ・カツオ・キビナゴ・アジなどの回遊性魚族が豊富であった。江戸期から明治の中ごろにかけては、しばしば大漁があり、引き網の全盛時代であったという。

しかし、明治の末ごろから漁場の自然環境（水温・プランクトン・潮流など）の変化などから、イワシ・アジ・ブリなどの回遊が減少し、地引網など沿岸漁業は衰退期に入った。

大正から昭和にかけては引き網漁業から、更にまき網による沖合漁業へと発展し、米水津村でもこのまき網漁業は宮野浦で栄えて今日に至っている。

昭和30年代の間越地区民総出の地引網
（『米水津村誌』より引用）

間越の漁場は、江戸期から長い間、浦代浦の漁業権が行使されていた。また、戦前は間越沖のハマチ漁場は県下第一の好漁場であったが、地引網などの網漁業は、目の前に魚群がきても、浦代浦の網元の漁船が操業している間は、間越の漁師たちは、漁をすることができなかったという。間越の漁師には、長い間、地先の完全な漁業権さえも認められない不利な立場におかれていたのである。

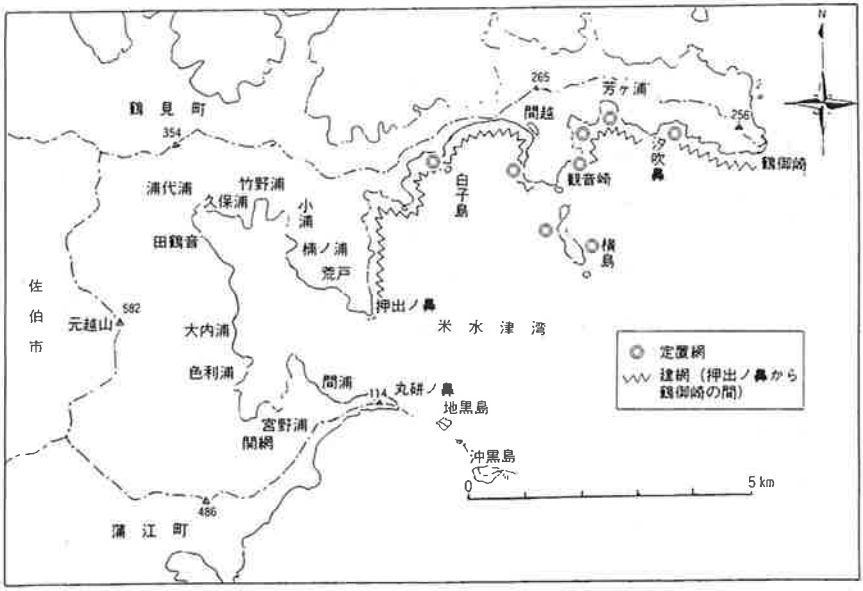
＜昭和四十五年ごろの間越の農・漁業＞　昭和四十五年（一九七〇）の八月に間越地区の地域調査を行った県立佐伯農業高校の地理同好会の生徒たちがまとめた報告書[7]には、間越の農漁業の印象を次のように伝えている。

間越の農業の状況をみると、私達が観察したところでは、湖の周辺部や山麓の段々畑の一部に野菜やミカンが栽培されている程度である。水田は皆無であり、わずかの段々畑も、その半数以上は荒地化して夏草の茂るのにまかせている。昭和四十五年現在では、間越の戸数は二五戸で、一戸が挙家離村している。また、現在では耕地の約六〇％以上は荒地とし

て放置され、利用されていない。専業農家は一戸もなく、ほとんどが二種兼業農家であり、漁業が中心である。漁家は一三戸あるが、主なものは、大敷網（漁船二隻）、ジヤミアミ（三隻）、それぞれ一〇戸ずつが生産組合を結成して操業している。漁場は沿岸で、横島付近までの米水津湾内である。また、五、六戸は建網によって漁業を営んでいる。私達が訪れた時には、湾内でジヤミアミによるシラス漁をしているところや、浜辺に干されたシラスを箱づめにしているのを見た。最近はかなり漁があり、比較的高値で出荷されるという。米水津漁協を通して、佐伯市へ出荷されている。

〈磯建網・定置網が中心〉　現在、間越の漁業は磯建網（一一戸）・定置網（生産組合一）が中心で、その他、小型底引網（二戸）がある。間越の漁場を示すと、第3図のとおりである。すなわち、定置網は米水津湾内の白子島・観音崎・横島・芳ケ浦などの地先や付近一帯が主な漁場となっている。

磯建網は、湾内の押出ノ鼻より鶴御崎までの磯や藻の生えた地域が漁場で間越地区の一一戸の漁家で、一一区



第3図　間越の定置網・磯建網の分布
（現地での聞き取り調査による）

域に漁場を分けて、順番を決めて漁業を営んでいる。底引網業の漁場は、豊後水道や愛媛県の宇和海などで操業されている。

また、定置網・建網による漁獲も、魚種は、アジ・ハマチ・クロ・シビ・スルメ・タイ・モイカ・イシダイ・ハゲ・イセエビなど種類が多いのが特徴である。漁獲された魚は、主として佐伯市場に出荷されるが、ハマチなど豊漁のときは、佐伯市の業者と取引している。更に、広島県の業者に沖売りで出荷されることもあり、高級魚については、生けすで一時飼育して出荷される。

間越の漁港

近年、漁獲が減少していることや漁業の後継者不足など、深刻な問題があり、間越の漁業にとっても養殖や水産加工などの導入による漁業経営の多角化など課題となっている。

消費生活からみた生活圏

間越の集落の生活環境について、その概況をみると、第3表のとおりである。すなわち、地区内には商店は一戸あって、酒・ビール・調味料・パンなどの食料品と日用雑貨などを販売している。

しかし、佐伯市からの移動販売商人からの消費物資の購入の占める割合も高い。日用雑貨や食料品については、毎日二台の移動販売車が地区にやってくるが、その他、金物は週一回、肉類は日曜ごと、衣料品は月一回、いずれも佐伯市からの移動販売車である。

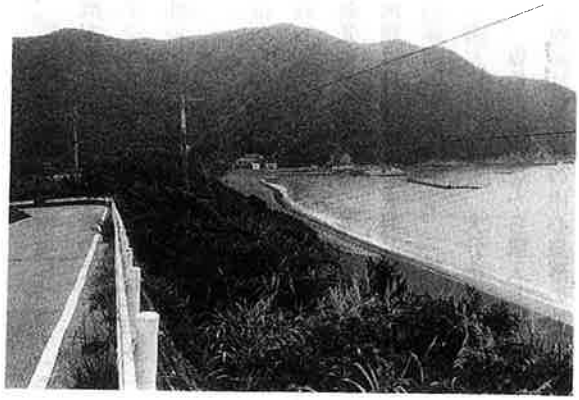
一方、高級品の購入についても、大分市まで出かける人はほとんどなく、佐伯市の商店から購入しているし、急で間に合わない商品は鶴見町の中心集落の地松浦で購

第３表　間越の生活環境

区　　分	施　設　整　備　状　況	備　　考
飲　料　水	●飲料水供給施設	昭和52.11完成
交通・通信	●鶴見町猿戸から車道開通	昭和53.12
	●間越漁港関連道竣工(延長2,040㍍、工費１億円)	昭和52. 3
	●芳ケ浦の電話開通	昭和39. 3
し尿・ごみ処理	●し尿　佐伯市より業者が収集	
	●ごみ　米水津村・鶴見町共同で収集	
集　会　施　設	●間越生活改善センター	
観　光　施　設	●休憩室(鉄筋平屋73平方㍍、更衣室、シャワー・ベンチ・トイレ)	昭和55. 3完成
	●駐車場(広さ1,500平方㍍、収容台数乗用車82台)	
	●園地	
教　　育	●向陽小学校間越分校	
	給食室落成	昭和43. 4
	学級数２　児童数６	昭和62. 5

(米水津村提供資料及び現地調査により作成)

入している。また、芳ケ浦では、日用品は船で鶴見町の梶寄に買いに行くという。したがって、消費財購入経路には、地区内の商店と、佐伯市からの移動販売商人、鶴見町地松浦の商店の三ルートが中心で、特に佐伯との関係が密接である。日常の消費財の購入について、米水津村内の商店からの購入はほとんどなく、陸の孤島的な性格がでており、消費生活からみた生活圏は鶴見町や佐伯市に属しているといっても過言ではない。



間越線(猿戸―間越　1.3 km)

医療・交通・通信　古くから陸の孤島といわれた鶴見半島では、生活面でも切実な問題の一つは「救急医療」の問題である。辺地で急患がでたらどうするか。間越では急患がでた場合、昔は米水津湾を手押し船で竹野浦まで連れていったという。現在では、道路も整備されたので、救急車で佐伯市の病院へ直行している。

間越の集落は、行政的には大字浦代浦に属しているが、中心集落とは直線コースで六キロメートルほどの距離があり、陸路では、約一五キロメートルで、鶴見町の中心集落の地松浦―鶴御崎トンネルを経て行かねばならない辺地に位置している。また、佐伯市よりバスでは約一時間一五分、鶴見町猿戸で下車し、それから鶴見半島の標高六〇メートルをこえて約二キロメートルの地点に間越の集落がある。

昭和五十六年に鶴御崎トンネルが開通し、中心集落の浦代浦までの距離が短縮され、開通前は車で一時間（佐伯市経由）を要したが、現在は三〇分ほどで浦代浦まで行ける。交通上の不便さは、学校教育の上にも大きな影響を与えており、特に間越の中学生は浦代浦の北中学校まで、村当局によって借り上げられたタクシーで通学している現状である。昭和四十五年ごろの間越の小・中学生の状況をみると、間越に所在する美潮小学校には、鶴見町の猿戸・広浦両地区の児童も通学しており、また、美潮小学校卒業生は鶴見町の中浦中学校へ通学するといった、変則的な相互委託が行われていた。

また、通信では、間越・芳ケ浦は鶴見町東中浦局区内に属しており、郵便番号も鶴見町の大島・梶寄浦・猿戸・丹賀浦と同番号となっており、鶴見町の生活圏に入っている。郵便も、「米水津村大字浦代浦〇〇番地」のあて名で発送すると、いったん米水津局に送達され、東中浦局へ回送されることになり、遅配となる[8]（昔は、そのための遅配がよくあったという）。

注

(1) 佐藤蔵太郎『佐伯志』（豊国史談会　大正三年）

(2) 上浦町浅海井海岸から南西方へ延びる津井―木浦構造線より蒲江町深島に至る広範な地域に四万十層群が分布。その後の研究により時代は中生代のジュラ紀～白亜紀後期と解明された。地質構造区分では津井―木浦構造線以南は四万十帯とよばれ、さらにその中は北東―南西に延びる断層・構造線によってさらに地質構造区分され、北から順に、番匠帯、大入島帯、堅田帯、浦代帯、蒲江帯の五つに区分され、南へいくほど古い時代のものになる（『日豊海岸国定公園学術調査報告書』による）。

(3) 志賀史光・川野田実夫「日豊海岸地域の水質」（『日豊海岸国定公園学術調査報告書』大分県　昭和六十年）

(4) 阿部泰雄「日豊海岸自然林の土壌呼吸」（『日豊海岸国定公園学術調査報告書』大分県　昭和六十年）

(5) 『米水津村の文化財』（米水津村教育委員会　平成七年）

(6) 大分大学教育学部地理学教室「鶴見半島の地域調査」（『大分県地理第6集』大分県地理学界　昭和四十一年）

(7) 県立佐伯農業高校地理同好会「米水津村間越の地域調査」（『県南の地理』第2号　昭和四十六年）

(8) 矢野彌生「米水津村の人文環境」（『米水津村誌』米水津村　平成二年）

行事案内

日　時　十一月五日(日)　午後二時四十分より

場　所　弥生町民会館前野外ステージ

内　容　日向御高智神社に伝わる佐伯惟治祭祀のため奉納した神楽の披露